

胃ろうを考える

胃ろうは、おなかに小さな穴をあけて胃とつなぎ、チューブを挿入して直接胃に栄養を注入するためのいわばおなかに作った口です。本来の口から食べ物をとることができなくなった場合の栄養の摂取法として利用されます。

◎胃ろうの特徴

胃ろうは胃に異常がなければほとんどの人に安全に作ることができ、作って一週間ほどで利用できるようになります。口から食べ物を食べる楽しみを残しながら足りない栄養を胃ろうから補うこともできます。入浴は胃ろうがあっても特別な処置なくそのまま湯船につかることができます。本来の口と同じで特別な消毒などは必要ありません。胃ろうがいらなくなれば装着した管を抜くだけで一日で閉じてしまいます。専用の管を装着し胃の内容が外へ漏れないようにするとともに口が閉じないようにしています。栄養食や薬や水分はチューブを通過するものであれば何でも注入できます。家庭で、家族でも、また、自分でも注入できます。鼻から入れるチューブよりも苦痛や肺合併症が大変少なくなります。点滴注射による栄養補給と比べても特別な技術や管理は必要なく栄養分は腸管から吸収されるのでより自然です。チューブにつながれた時間も少なくリハビリなど時間の有効活用ができます。

◎胃ろうを作るかどうかの問題

胃ろうは口から食べ物をとることができなくなった人が命をつなぐためのものです。胃ろうは管理さえよければ余病を併発しない限り天寿を全うできる手段です。それだけに判断を誤れば本人家族ともに大きな悩みを抱えることとなります。胃ろうを導入すると途中で中止するのは人為的に命を絶つことになる場合もあり、これが胃ろうの最大の問題点といえるでしょう。決定はまず本人の意思が優先されるべきで、判断できるときに意思表示をしておくことも大切です。

◎胃ろうの適応

消化管に大きな問題がなく、栄養さえ取れば回復する見込みがある場合は胃ろうが最適でしょう。しかし、胃ろうの是非は個々の病状やおかれた介護環境などで全く異なります。自分で判断できない状態になった時単なる延命を望む人はいないと思いますが、中にはどのような形でも生きてくれさえすればというような家族もおられます。介護の主体を担う家族が十分に理解し納得して選択しなければなりません。

◎病院の考え方

下呂市立金山病院では入院していただく場合、病状を改善させ退院していただくことを第一に考えます。退院するために栄養管理の面で胃ろうが必要であれば積極的に胃ろうを勧めます。点滴注射のみによる延命は行わない方針です。しかし、点滴も胃ろうもなく痛みや苦しみのみを取り除く手助けをうけながら尊厳をもって終末を迎えていただくことも病院の果たす役割の一つと考えています。